

「心を一つにし思いを一つにして」

9月12日、沖縄県那覇市の市議会においてある議員が「出生時の戸籍上の性別と性自認が異なるトランスジェンダーをめぐり、……『学校で頻繁に耳にしたり、トランスジェンダーになったという人の動画をネットで見たりすることで伝染する。影響を受ける』という趣旨の発言をした」(NHK)といひます。しかも、それだけに留まらず、「学校でLGBT教育を行うこと自体がトランスジェンダーを増やすことにつながる可能性がある」とか、「心の性別に基づく配慮よりも、心の傷を治療できる心理士を紹介することや配置して対応してもらうことではないか」とも発言した、と。

一言で言って「ありえない」。このような差別を許してはなりません。セクシャルマイノリティの問題が積極的に取り上げられるようになってずいぶん時間が経ったように思っていたましたが、まだまだ公的な場で公人があからさまな差別発言をする社会なのだと思わされました。しかし同時に、自分もまた「いつでも差別者になり得る」のだとも感じたのです。

差別はどこにでもあります。たとえ自分自身にそのようなつもりがなかったとしても、です。突き詰めれば何もできなくなると言われるかもしれませんが、自分の不用意な発言が差別を引き起こす可能性があることは留意しなければならないでしょう。

そしてそれは、キリスト教という信仰でも同じことが言えます。「私はキリスト教と出会い、イエスと出会って生きる力を与えられました」と、自分自身で思うことはよくあることでしょう。確かに神は「打ち砕かれた心の人々を癒し／その傷を包んでくださる」(詩編147:3)方だからです。

でもし、それを「キリスト教と出会っていないあなたはかわいそう」とか、「キリスト教と出会っていない者は救われない」とか発言したらどうでしょうか。これは、思想信条を強制することになるばかりか、相手の個性を奪ってしまうことになりかねません。まして、聖書の言葉を自分に都合良く解釈して用いることはあってはならないのです。

「さて、兄弟たち、わたしたちの主イエス・キリストの名によってあなたがたに勧告します。皆、勝手なことを言わず、仲たがいせず、心を一つにし思いを一つにして、固く結び合いなさい」(コリントの信徒への手紙一1:10)。パウロは決して、「特定の思想だけが正しいのだから、全てを棄ててそれに従いなさい」と言いたいものではありません。また、「自分を無理矢理閉じ込めて、形だけ、見た目だけ『一つ』になっているようなふりをしなさい」と言いたいものではありません。「自分だけが救われている」あるいは「自分だけは大丈夫」とうそぶいて、他者を顧みようとしない者たちに「神の愛はあなたたちだけのものではなく、全ての者のために注がれていることを思い起こしなさい」と伝えたいのです。

「わたしの僕ダビデは彼らの王となり、一人の牧者が彼らすべての牧者となる。彼らはわたしの裁きに従って歩み、わたしの掟を守り行う」(エゼキエル書37:22)とエゼキエルが幻に見たように、イエス・キリストに従う一人ひとは、「隣人を自分のように愛しなさい」との教えを大切にしているはずです。また、「これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(マタイによる福音書18:14)とイエスが言われたように、神が造られたこの世界に不要な存在など一つもありません。神が大切にされている一つひとつの存在が、互いの違いを認め合い、互いに支え合い、互いに愛し合う。それがパウロが「心を一つにし思いを一つにして」という言葉で伝えたかった大切な意味なのです。

私たちは一人ひとり、違う種を持ち、違う人生を生きています。社会にはダイバーシティ(多様性)があり、私たちもその社会に生きる一人です。「にもかかわらず、社会には差別・被差別が生まれている。『私』は『差別者』にも『被差別者』にもならないために、いま社会で何が起きているのか、何が隠されているのかを追求し続けていく。そういったことが不可欠なのです」(平良愛香、『あなたが気づかないだけで神様もゲイもいつもあなたのそばにいる』、学研プラス、2017)。

